

# 音楽革命の正体をあばく

## ——私的ベートーヴェン論

対談 **坂本龍一** (音楽家) **小沼純一** (音楽文化研究者)

音楽の圧倒的な推進力。しかし時折感じるドン臭さ。  
万人を魅了する楽聖の本質とはなんなのか。

『スコラ』(NHK Eテレ)でお馴染みの二人に、楽曲や時代背景からとことん語ってもらった。

小沼 坂本さんは、東日本大震災以降、といつてもいいのでしょうか、「東北ユースオーケストラ」に関わってこられました。今年の三月にはベートーヴェンの「第九」を演奏する計画だったそうですね。

坂本 今の形の「東北ユースオーケストラ」になったのは二〇一六年で、今年の三月に五回目の定期演奏会を開催する予定だったんです。五年の節目ということで、東北だけでなく、この何年かの自然災害で大きな被害を受けた地方の人たちにも加わってもらって、幅広い年代の合唱隊と一緒に音楽を作ろうということになった。合唱付きの音楽は他にもありますが、日本人はみな第九が好きですからね。毎年、第九が演奏されない県はないそうですね。なかには歌詞を覚えてしまっている人もいるくらいで、老若男女と一緒に演奏するにはいいんじゃないかと思いました。僕自身も馴染みがありますしね。

### ベートーヴェンはドン臭い？

小沼 坂本さんは、その第九やベートーヴェンについて、どう評価されているのでしょうか。

坂本 難しいところですね。というのも、ベートーヴェンはディテールで、あまり好きじゃない

ところが多い。特にピアノ曲の、低音の密集した濁った和音。たとえばピアノ・ソナタ《ワルトシュタイン》などが典型的ですが、あれが小さいころからたまらなく嫌いでした。当時はピアノという楽器が発展途上でしたから、仕方がない面もあるんですけど。

それにメロディも、アルペジオ(分散和音)が多いし、いわゆる典雅なメロディは書けなかった人でしょうか。展開も、和音のアルペジオをどんどん続けていくようなものが多い。例を挙げたらキリがないけれど、非常に雑駁ざつぱくなというか、乱暴なところが多いと思う。

ただ、音楽の「推進力」とでもいうべきなのか、それは本当に他に例を見ないものがありますね。たとえば、第九の中で特に好きで、いろいろな音楽の中でもいちばんすごいと思う部分は、四楽章のコーラスが終わった後で八分の六拍子のマーチになり、テナーが歌い終わった後、オケだけで二重フーガのストレッツタが始まります。たかだか一分半くらいですけどね。Fシャープのピークまで一気に駆け上がるわけですが、ここは西洋音楽史上、類を見ないほどのエネルギーの塊というか、時間を前へ前へと押し進めていくその力がね、もはや、異常だなと思つて。

### ヘーゲルの知性との同時代性

小沼 以前、坂本さんは、現在の私たちがベースとして起している音楽の始まりはバッハにあるとおっしゃっていた。でも、バッハがいつとき忘れられたり、また発掘されたりする一方、ベートーヴェンはずっと一定の評価が続きます。実際、一九六〇年代から七〇年代あたりには、ケナされたりウンザリされたりもするんですけど、ずっとある種の強い存在感を保っている。

ベートーヴェンの生きた時代は、フランス革命からナポレオン、それ以後に至る過程に重なつていて、その体制、あるいはパラダイムとでもいべきものが、いまだに続いているという背景もあるかもしれません。

坂本 ナポレオン(一七六九年生まれ)と、ヘーゲル、ヘルダーリン、ベートーヴェン(ともに一七七〇年生まれ)は、一歳違いですよ。

小沼 ベートーヴェンの半生には、そのナポレオンの影がつきまとっている印象があります。シンフォニー三番では、当初ナポレオンに向けて書いた献辞を消した、というようなことがあった。その後すいぶん経つてから、今度はナポレオンの敗退を機に《ウェリントンの勝利》

似たようなものとしては、たとえばモーツァルトの《ジュピター》四楽章の、再現部になってからの半音階的な展開があります。ちょっと質は違うけれど、これもまた悪魔的な異常さなんでしょうね。あれは悪魔がハ長調で書いたと思えない音楽ですね。いずれにせよベートーヴェンには、他に例を見ない音楽の力というか推進力というか、そうしたものがそこかしこにある。僕にとつては、そこがいちばん魅力ではあります。

小沼 坂本さんは、どちらかというと、ゆつくりめのものがお好きでしょうか。でもベートーヴェンは、そういうドライブ感というか、推進力のほうに魅力を感じると。

坂本 そうですね。ただ、音楽として好きかという、第九なら三楽章の方が好きです。あるいは《運命》の二楽章の方が好き。それから、後期の弦楽四重奏のアダージョの方が好きです。好き嫌いでいえばね。

ただ、第九の三楽章などは、一方でちょっとナイーヴすぎるというか、すごく「ドン臭い」ところがあるでしょうか。

小沼 あはは(笑)。

坂本 なんとというか、本当に平凡な田園の風景画みたいになってしまう。何のひねりもない。